

＜寸言知＞断章

—— 諺などの短句に関する知識論的考察 ——

● 池 田 光 義

諺・成句、名言・名句、金言・格言、警句・箴言、〇〇訓などに限らず、標語、キャッチフレーズ、あるいは俳句、川柳、短歌などの一部にも、人生や社会や世界の事象に関するある種の知識や認識、評価や判断、観方や態度あるいは教訓や指針や処方などが含まれている場合が少なくない。そうした種々多様な短小の言説形式に共通にみられる広義の認知的内容や機能を＜寸言知＞というメタ認知図式（概念）で横断的かつ仮想的に総括し、その特性の一端を断章的に考えてみるのが本稿の趣意である。

〔1〕総合知としての寸言

「燈台もと暗し」は、直接的には、「燈明台の直下は薄暗い」という事態に喩えた、「身近なこととはかえって分かりにくい」という一般的事実判断である。しかしである。落ち合う約束の知人を探し求めてキョロキョロしながら歩き回っていると、足元の段差に蹴躓く。つま先の痛みを顔をゆがめながら「しまった、まさに燈台もと暗しだな。気をつけないと」と呻く。この後悔と反省の感情に満ちた場面では、かの諺は教訓ないし指針の機能的色合いを強く帯びる。この句は「自分の足元には気をつけろ」、さらに一般的に「自分の身辺や自分自身についてはかえって疎かになりがちだから注意すべし」という訓戒的・規範的ないし指針の命題も内包しているのである。またそれは「人間というものは対象や他者に意識を奪われて自己自身を忘れてしまう存在者である」という一般的な人間観も根底に滲ませている。「かわいい子には旅をさせよ」は直接的には「子をかawaiiと思うなら、甘やかすことなく、むしろ世間に出していろいろと苦労させよ」という当為・指針を示す命題である。しかしそこには、「かawaiiと思う子はどうしても甘やかしがちになり、よって世間知らずで自立心のない人間に育ててしまう傾向がある」「人間的成長には実際社会における多様な数多くの、そしてときには苛酷な体験が必要である」という事実認識・判断が含意され、さらにはある種の人間観・人生観が漂う。「目くそ鼻くそを笑う」はそれ自体では「自分の欠点に気づかず他人の欠点を嘲笑う」という比喩的な事実描写・記述だが、具体的な状況によっては、その嘲笑う本人をからかい嘲笑うという風刺的意味・効果をもつ発話ないしコミュニケーション行為となる。諺などが、一見、“客観的な”事実描写の外観をとりながら、その実、わが境遇を嘆いたり、自虐したり、笑い飛ばしたりできるのも、あるいは相手を揶揄したり、慰めたり、諫めたりできるのも、ときにはまた貶しているのか褒めているのか曖昧なままに相手を宙吊り状態に置き去りにできるのも、それらが機能的に紫陽花で玉虫だからだ。

このように、ここで寸言知と呼ぶ短小言述は、同じ言明が様々な程度、様々な様相・側面ないし階層において同時に事実認識、価値判断、教訓・指針提示などの多様な性格・機能を持ち、しかも使用されるその時々具体的な状況に応じてその多様な性格・機能の相互関係・布置が柔軟に変化・転換するという特性がある。それは、寸言知のすべての事例にみられる共通属性とはいえないが、その典型的な家族的類縁性のひとつを示しているといえる。諺などが大なり小なり実際生活における規範的な役割や教訓的な効果を持ちながら、直截に「～せよ（～するな）」とい

う指示的・当為的形式をとるものが意外と少ないといわれるのも、このことと関連があるのかもしれない。反感を買いがちなあからさまな指示・当為・命令形式を用いずとも、その七変化効果を活用することで“客観的な”事実描写の形式によって実質的に十分な規範的・教訓的効用を得ることができるのである。

寸言知のこうした家族的類縁性は、それが実践的生活知・日常知の全体システムの一要素、それも特異的に凝集された要素であることと関連している。〈生活知〉では大なり小なり世界観・社会観・人生観、事実認識、価値判断、教訓・指針の精神作用が混和し融合している。もちろん、いずれかの作用が前面に出たり強調されたり、あるいは全体の色調を染め上げることはある。しかしその場合でも、その作用が他の諸作用から完全に分離独立することはほとんどない。たとえ外見上はあったとしても、基本的には相互の背後的・潜在的・含意的な連関は常に維持される。そもそも、一般的にみても、いかなる知であろうと大なり小なり含意・付随・関連知を背後あるいは内部・根底に忍ばせているものである。「A氏の子どもは三人とも女子大に通っている」で表される命題知には、「A氏には娘が三人いる」「A氏には息子がいない」「A氏の長女には二人の姉妹がいる」などの（〈否定知〉を含む）無数の命題知がアプリアリな状態で概念論理的（分析的）に含意されている。またそれは、「A氏は結婚している」「A氏は三十台ではない」「A氏は生活が楽ではない」などの無数の命題知を蓋然的に含意している。さらにそれには、「A氏は教育熱心で子ども想いの親だ」「A氏は娘に甘い父親だ」などというA氏に関する属性判断と人物評価（価値判断）とを微妙に混在させた付随的帰結が含有されている。

この背後的・潜在的・含意的な知の連関が狭義の認識作用の内部だけでなく、事実認識、価値評価、訓戒・指針といった様々な精神作用の間でも働いているというのが実際的な生活知、すなわち知の基本形の大きな特徴である。そうした精神作用の未分化な渾然一体こそが知の原基的な様態なのである。根源的には「かくかくはへびである（へびはかくかくである）」・「それは危険だ」・「それを避けねばならない」は無差別で一体なのである。この未分化状態が内部的に（そしておそらく生の過程全体から）分化分離し、各作用がその機能性を高める一方で自律自存の仮象を帯びることで生じた知の副次的派生態が、いわゆる価値判断を遮断した事実認識、事実認識から自立した価値判断、教訓・指針を含意しない認識等々なるものなのである。問題はしかし、この派生態の知が、その機能性向上の代償として、本来的な（つまり生の過程全体との関係における）相互連関を直接的にはメタ知としても喪失ないし希薄化させ、自律自存の仮象を実体視する傾向を強めていくことである。しかも、この実体化の傾向が——知の全体が未分化的統一から内部分化・差異化していくとともに——原基の様態を素朴に体現しているはずの生活知自体にも浸潤していくことで、その相互連関は一段と不透明になっていく。寸言知は、断片的で瞬間的なかたちながらこの本来的な関連性を思いださせてくれるのであり、それがわれわれの興味を惹くのである。言い換えると、知的・文化的共同体に蓄積・伝承された知のストック全体としてだけでなく、個々の知にあっても、——少なくとも含意的、潜在的に——ひとつの総合知、知のマイクロコスモスを体現していることが、寸言知の興味なのである。

【2】短句性の認知論的意味

言語形式からみた寸言知の際立った特性がその短小さと簡潔さにあることはいうまでもない。その制約の中で、あるいはむしろその制約と効果的に結びついて理解や記憶を容易かつ確実にし、またインパクトを強めるために比喩、対句、誇張などの表現技法を凝らし、語呂や語調に気づかい、具象性や定型性を与えているものが多いのも寸言知の特徴である。しかしここで考えてみた

いのは、少なくとも寸言知のプロトタイプ（群）では、その短小さと簡潔さに「一文（一句）＝単独命題」ないし「若干文＝単純複合命題」の原理が対応していることである。単純命題で思念される単純で一面的な事態が（およそ事態という概念やイメージそのものが無化し無意味化するまでに）複雑に紛れあう無数の複合事態として現れる（と解されている）現実世界に対してあまりにも著しいコントラストをなしていることである。つまり、寸言知の認知内容が現実のある一面だけを鋭利に切り取り、それ以外のすべての側面を捨象し、単独命題やごく単純な複合命題で表現したものでありながら（あるいはそういうものとして一般的には了解されているにもかかわらず）、かくも無数多様な要因が複雑に絡みあい錯綜態を呈する現実の生活・社会・自然に対して（あるいはその中で）それなりに、いやその一面性ゆえにかえって、細密で複雑な複合命題よりもはるかに＜現実的な有効性＞を示すことができる背景や理由を探りたいのである。

まず、簡潔な短小形式が＜削ぎ落とし＞や＜雲隠し＞効果をもつことはつとに指摘されるところである。曰く「余計な贅肉が削ぎ落とされ夾雑物が取り除かれると、その空白に何かを読み取ろうとする」「隠されると、その分、解釈者は積極的に補完・補強し、見えない部分に何かを見ようとする」と。簡潔短小ゆえに、不完全なものを完全化し、不可視なものを可視化し、ペールの背後に隠されたものを想像しようとする強い心理作用が励起されるという心理的説明である。この説明図式をもう少し展開すると、そうした短縮・省略には、利用者や解釈者を意味構成・再構成の作業に強く引きこんで、積極的に能動的で主体的な解釈、理解、関与を誘発する効果があるということであろう。解釈者の側における補完・補強行為（それは想像・予感・予測行為でもある）が自己の主体的な活動、能動的な関与として無自覚的にモニターされ、それがとりわけ情動による価値判断をさらに賦活し、表象内容のインパクトを強めるのであろう。もちろん、補完行為が作動・展開するためには受け手の側に一定の一般的前提知識が前提とされ、それが活動モードに転換される必要があること、受け手の補完行為、つまり意味構成・再構成の水準がこの活動モード化する前提知識の質と量に規定されることはいうまでもない。

さらに心理（神経）エネルギー的視点も事態の一面を解き明かすかもしれない。理解や認識は、それをひとつの心理的な活動過程とみなせば、[より無意識的・半意識的・周辺意識的な個別的・部分的心的過程の相互作用⇒（対象化された形式で与えられる）意識内容]の不断の反復という形式で現れる（矢印は相互作用の＜集合効果＞を示す）。その際、一般的に、心的過程の個別作用に心理的エネルギーが割かれれば割かれるほど、矢印の集合効果は衰える、つまり意識内容の品質は低下するといえる。逆にいえば、高品質の認識内容を得るためには、個々の心的作用にはエネルギー支出を最小に抑えるのが心理的な必要条件となる（短期記憶における情報の処理と保持のゼロサム関係の原理をポラニーの「暗黙知⇒顕在知」の発想につなげてみればイメージが掴み易いかもしい）。この点で寸言知の簡潔な短小形式によって省エネ効果が生じ、この関係で節約されたエネルギーをその含意・付随・関連命題の展開に、つまり寸言知の内容を広げ深めるといふ本来の作業に集中できるのである。このエネルギー的視点が認知戦略においても重大な比重を占めることは存外に看過されがちである。なお、寸言知には定型をとる事例が多いのも、この力の節約効果とも関連しているといえる。知の定型性により、主体の側にアプリアリに備わる、それぞれの型に対応した定型的な思考・判断・感受パターンが容易に触発・作動され、そのことが認知の確実性と省力効果をもたらすからである。

しかし問題の核心は寸言知のこうした形式的・心理的な面よりも、それがかかわる対象の実質的な認識内容の面にある。すでに触れたように、寸言知は単独命題ないし単純な複合命題の形式で表現される単独事態ないし単純な複合事態を対象とする。それにもかかわらずなぜ現実の錯綜

世界に対して一定の有効性・妥当性を示しえるのかを考察する足掛かりとして、その真逆、つまり超複雑な超複合命題を作りあげていくとどうなるかを考えてみるとよい。それはある対象や事態に関する概念規定や記述（説明・予測）の徹底的な精密化・厳密化、多重化・多面化を意味するだろうが、これによって対象の複雑性や錯綜性が十分に把握されることになるだろうか。対象や事態の厳密化、多重規定化とは、他面では、その尽きることのない潜在的な可能性と内的含意、他の対象や環境との限りない相互連関・作用を一意的に確定化し固定化し限定化することを意味するからである。しかも同じ理由から、それを細密化し複合化させていけばいくほど、その＜全き統一性・全一性＞は私たちの掌中からこぼれ落ちていく。おそらくそのためであろう、集合的無意識はこれとは逆方向の認知戦略を定着させたのである。

まず確認すべきことは、ある単純な事態を記述する単純な命題は、無数の関連事態をそれぞれ記述する無数の含意的・付随的命題に潜在的に接続するということである。その接続関係は純粹に論理的あるいは実質内容的な性質のものであるかもしれないし、メタファーや連想にもとづくものであるかもしれない。だがいずれにせよ、ひとつの命題をアクチュアルに知ることは同時に、その認知的な前提となる（瞬時的には不確定で無数だが決して無限ではない）一連の命題を潜在的に知っているだけでなく、他の一連の含意的・付随的命題を可能的に知ることもである。

「今日の午後はかなり激しい雨になりそうだ」と知れば、「傘がないと濡れる」「あの通りは車が混雑する」「でも庭の草花には潤いになる」等々を潜在的に知る。あるいは命題知に限らずとも、ある図形がある程度知っているとは、それがどのような図形の部分ないし全体になりうるのか（あるいはなりえないのか）、他の一連の図形とどのような布置をもちうるのか（あるいはもちえないのか）を知っていることでもある。さらにいえば、知というものを、その意識的に対象化された“表象”様態に限定せず、様々な心理的階層・次元で＜一定の規則的な活動形式を再現・微変形・転換できる能力＞として、つまり表象内容に限らず＜表象の仕方それ自体＞として捉えることも肝要である。そうすれば、例えば最近のレトリック論やアプリアリ思考などが示唆しているように、一文で表されるひとつの命題知も、一定の活動形式、＜型＞、規則的パターンの創造的な相互転用の連関に基づいた働きであり、また新たな知の成立のための前提条件を潜在的に準備する活動であると考えることができる。つまり、潜在的・顕在的、内容的・形式的な知の相互連関がより鮮明に把握できるのである。いずれにせよ、ある知の品質と水準を測るバロメーターは、それがどれだけ豊富に、そしてどれだけ高品質・高水準の含意的・付随的知を潜在させているかにあるとさえいえるだろう。

さて、寸言知とは、すでに述べたように、複雑に絡みあう相互連関・作用の超錯綜体から特定の側面を（とりあえずそれだけで成立する）＜独立事態＞としてクリアカットに切り取り再構成する方式である。そしてまさに他の事態との相互依存関係が（とりあえず）全面的に消し去られ、制約・限定として作用する特定の結合・連関関係から解放されることで、寸言知がその時々コミュニケーションにおける特定の具体的な状況・文脈でアクティヴ化すると、それが含意する関連知の中から、その状況・文脈を構成している背景や事態と適合的な特定の関連知も容易に作動することになる。複雑な複合命題との論理的、実質内容的等々の関係によってあらかじめ厳格・精密に知の内容を緊縛＝規定しておくことは、それが徹底していればいるほど、むしろその時々多様で特殊な状況・文脈に適合的に対応する柔軟性を殺ぐことになるのである。これが、現実の複雑性に対処するに寸言知があえて簡潔な短小性、すなわち（時として極端なまでの）一面性に徹しきることの認知論的理由の一端であろう。この短句化による絶大な効果は、長文から適当な一文一句を「切り取り」、それ自体で完結した独立文・単独句に仕立て上げると、文中に埋

め込まれ文脈に繋がれていたときは全く異なる光彩を放ち、余韻と含蓄を深めるという事実には、はっきりと確認できる。古今東西、「○○金言集」の類が絶えないわけである。

諺の膨大なストックの中には<打ち返し>とか<対義結合>などと呼ばれるペアがある。命題内容が論理的にみて互いに反対ないし矛盾の関係を示すような諺である。「三人寄れば文殊の知恵」⇔「船頭多くして、船山に登る」、「渡る世間に鬼はない」⇔「人を見たら泥棒と思え」、「善は急げ」⇔「せいては事を仕損ずる」、「好きこそもの上手なれ」⇔「下手の横好き」など意外に多い(しかも新しい時代ほど多いという)。これは認識論的にみて何を意味するのか。それは、一言でいえば、一方における現実の複雑性・多義性と他方における私たちの認識力・判断力の限界性・限定性に由来する認識実践的な帰結である。諸々の現実事象の錯綜した絡みあい、私たちに対するその限りなく多義的で両義的な意味、それに対する私たちの側の(それらに比べればはるかに限定的とはいえ、限られた私たちの存在にとっては十分に)多数の実践的な対応可能性に直面し、私たちの認識や判断の方式や能力は必然的にアンチノミーに陥ってしまう。しかも、超経験的な対象に限らず、すでに経験的な対象であっても、それが一定の複雑性と多義性を呈示するときには不可避的にこのアンチノミーに巻き込まれてしまうというのが妙所である。矛盾律とは、相対的に確定的で単純な事物や過程に適合ないし特化した私たちの認識・判断の方式と能力に宿す一面性と限界性の論理的な結晶であり象徴でもあるのだ。私たちの日常的次元(そしてユークリッド幾何学)では地表を走る平行線は絶対に交わらないが(交わる場合は逆に地表平面が歪んでいると認識される)、地球規模では経線はすべて極点に収斂する。同様に、現実の直接的次元に関する言明に対しては絶対的な普遍妥当性を誇る矛盾律も、私たちの複雑な内面的心理システムや間主観的社会システムの別次元の言明では、その無効無力は決して稀ではない。

諺や成句の集合的無意識主体の凄まじい威力は、こうした現実の複雑性や多義性、あるいは私たちの対応可能性をあっさりとか<一文=単一命題=単一事態>に縮減し、それによって生じる一面性の欠陥を、必要に応じて適宜その<反対・矛盾命題>で打ち返すことで何食わぬ顔で補完・彌縫してしまうことだ。局面、局面に応じて認識・判断の思い切った単純化・一面化を図り、必要ならば次々と別の(ときに真逆の)同じように徹底して単純で一面的な認知・判断図式で交換し、その図式間の関係はあえて不問に付し、全体ないし結果としてそれなりにバランスをとり複雑性や多義性に対応していくという認知戦術である。もっとも、打ち返しの関係にある句は、結果的に互いの一面性を浮き立たせることになるが、これは、それぞれに含まれる対象知が相互関係においてその打ち返し命題の批判的メタ知として働いているということの意味する。

【3】寸言知の対称性と非対称性——情動認知機能の視点——

ある知的ないし生活共同体を前提にすると、(諺だけでなく標語・キャッチフレーズなどに含まれる)寸言知の多くは(a)特徴的な知の形式として成員に広く知られている共有知であり、(b)その内容はきわめて簡明であり、その真偽・当否についても議論の余地はほとんどない。それにはさらに、(c)その知のもつ生活上の重要性や価値も自明で成員の一致をみる、(d)それが共有知であり自明であり重要であると多くの成員が知っていることを多くの成員が知っているという特徴がある。つまり、寸言知は対象知のレベルだけでなくメタ知・メタメタ知のレベルでも非常に共有度、一致度の高い知の類型ということになる。(ちなみに「諺は日常経験の娘なり」「昔から諺に外れたものはない」「諺は巷の智慧」など諺についての諺、すなわちメタ諺もいくつかあるが、どうも修辭的にも内容的にも生半可な凡作が多いようだ)。あるいは、一定の社会圏における寸言知のこの共有性の高さこそがその様々な機能の前提となっているとさえいえる。街角で若い男

が携帯電話の端末を無料で配っている。話しかけられた年輩の男は直ちに寸鉄を刺した（つもりだった）。「タダより高いものはないんだよ」「いえ、これほんとにタダですよ。お金は全然要りませんから」「だから～、タダより高いものはないっていうだろう」。怪訝顔の若者も当然その商売のからくりは知っているわけだから、不機嫌顔の男の半畳が諺がらみであることを理解できれば、不機嫌顔の“洞察”を“洞察”して自らが不機嫌顔に反転し、年配男の不機嫌顔はしてやったりのご満悦顔になるはずだったのだが……。

寸言知が独特の語調や文彩によって様式化され、その活用文脈の前後の表現様式と趣を著しく異にしていなければならない理由の一つもここに存する。顕著に区別されなければ、特殊な発話・言説として際立つ寸言知が醸し出すその独特の効果が発揮されないからである。「そんなに慌ててやっても失敗するだけだぜ」と直截に言えば相手の反発を招くだけの「大きなお世話」にすぎないが、「急がば回れっていうじゃない」と諺を絡めれば穏当なアドバイスとして相手の心に届くかもしれない。寸言がその生活共同体や社会・文化圏における長い伝統をくぐり抜け、あるいは大規模なマスコミに媒介されることで脱個人的・超個別的な“空気感”を身にまとい、ある種の客観的で普遍的な公共性の色合いを染み込ませているからだ。短句の原著者が特定個人なのか無名氏なのかにかかわらず、一般社会のコミュニケーションで繰り返し使用される中で選別、修正、承認されて知的公共財の一部、一般的に流通する集合知の一要素とならなければ、どんなに鋭利で洒落な句も諺や成句の風情を漂わせない。そうした集合性の“後光”を帯びた短句を口にするだけで、いわば元祖の歴史的人物や匿名的な集合主体が特定個人としての当事者にかわる第三者として客観的かつ公平に相手に話しかけることになるのだ（あるいはそうとは知らずそう感じさせるのだ）。その場合、この短句がそうした一般的公共財たる諺や成句として周囲に意識されなければ、公共的客観化の効果は無と化す。その意味で、寸言知は、その特殊な知の形式・類型に関するメタ知の果たす役割が非常に大きな知といえる。そしてこのメタ知がきわめて主観的な性格や働きであるとも。

とはいえ、もう少し考えてみると、こうした共有度の高さ、別言すれば対称性の強さは知の表層に限られていることがわかる。これまでの文脈に照らしてみてもすでに、ある命題知が含意する関連命題知を具体的な個別状況に応じてどれだけの確かつ十分に顕在的・明示的に意識し活用できるか、この点での成員間ないしグループ間の落差（非対称性）には甚だしいものがあるといえるだろう。だが、ここで主題化したいのは、情動知の側面を考慮すれば、寸言知の非対称性はさらに大きなものになるという点である。「健康ほどありがたいものはない」「災害は忘れたところにやってくる」「美しい花には毒がある」などでは、その内容自体は一般的な知識・理解力がある者にとって陳腐なまでに自明であり、人生や社会にとってそれがもつ非常な重要性も議論の余地がない。つまり、一見すると、この類の寸言知はその内容理解に関して最も非対称性の弱い知の類型にみえる。しかしそれは、言葉によって明示化・形式化できる命題レベル、あるいは知性的側面のできるにすぎない。この側面と連動して知の総体を形成する感情・情動の側面においては、明示的内容では最も対称的な寸言知ほど著しい個人差、グループ差が生じやすいのである。

このことを理解するうえで非常に大切なのが、感情・情動は単なる主観的な反応ではなく、それ自体（とりわけ特定の状況・場面に直面しての）認知的な価値判断・評価であり、知性的機能によって代替できない独自の認知的機能を果たしているという最近の〈情動認知〉の考え方である。原初的レベルでみても、不安、恐怖、安心、喜びといった多様な感情に共通するのは、否定的にせよ肯定的にせよ、とにかく主体にとっての重要性・関連性（英語の *relevance* が最も適切に表現）の情動的判断であるということである。ここでのポイントは、この重要性・関連性の

感覚＝感情は直接的な情的判断・認知を超えて“高次”の（と一般に軽率にも形容される）知的判断・認知にも関与するという点である。このレヴェランス感、重大性の感情判断を伴いそれに支えられていないと、この知的判断・認知も十分に機能しなくなるのである。繰り返すが、これは、“高度”で複雑で論理的で抽象的な思考では特に大切な観点である（というこのメタ判断のレヴェランス感も当然、明示化・客観化しづらいのだが）。この認知レベルでは、理性が主体であり、＜感情の抑制・排除＞が不可欠であるという観念がいまだに根強いからだ。その際に注視したいのは、感情には、認知対象に対してだけでなく、認知活動それ自体やその（予測されたものも含めた）結果に対する価値判断の機能があることである。「そうだ、これには〇〇原理を使えばいいのだ」「あっ、これは場合分けが必要なケースだ」「これはブレイクスルーのアイデアだ」と、ある課題の解決法の手掛かりや戦略的方向をある種の予感として意識したり、得られた思考結果の理論的意味を評価するとき、この感覚的・情動的判断が肯定的に（あるいは否定的に）どの程度強く働くかは——かりに当事者の主観的意識においては具体的で明確な輪郭を伴わない何かが内面で蠢いているとだけ感知されるに過ぎないとしても——、その後の思考活動や応用過程を決定的に左右する。つまりこうした感情・感覚は思考の意味や重要度についての＜メタ認識＞の一種でもあり、＜メタ判断＞の機能があるということなのだ。ある対象認識についての有効なメタ認識は明示的な知的形式だけでは不完全であり、情的形式との合一が欠かせないのである。

＜客観的認識、冷静な判断の妨害要因としての感情＞というイメージを払拭するには、感情をその典型的な（とみなされている）様態に限定しないことが肝要である。不安、恐怖、喜びといわれる感情はむしろ、その極度に激しい例外的な意識の様態にすぎないと考えるべきである。その大半は、呼吸や瞬きのように、意識しようとするばなんとなくなくなく感じられるし、気にしなければ意識されることのない「気分のようなもの」として成立しているのである。「激しく興奮したり強度の感情に襲われたりして冷静に思考ができない」といわれる状態も、結果を原因と混同している場合が多い。思考作業がスムーズに進まない、様々な心理要因が散乱錯乱して一定方向に組織的に編成されないなどの状態に伴って、強度に否定的な情動的自己判断の結果が過剰に意識され、その意識がますます作業を混乱させていくという負のスパイラルの中で、混乱因子としての感情だけが一方的、一面的に強調される傾向が強いのである。認知的な機能不全状態とは、あえて理性と感情という二分法を使えば、両方の機能の不能不全とその相互的な負の劇化によってもたらされると考える方が合理的なのである。逆に、思考過程が効率よく進展しているのは理性によって否定的な感情要因が抑制されているからではなく、——撮影が順調に進んでいる間はカメラの背後で沈黙したまま目を光らせる監督のように——むしろ感情が十分に働いて進行状況を肯定的に自己評価し、その方向での思考作業を指示し促しているからである。首尾よい進捗を逐一強く意識し大いに興奮すれば、それだけ心的諸要因の集約的組織化も乱れ心的エネルギーも消耗するだけであろう。感情が働かない（と感じられる）ことが、少なくとも事実上は——低コストでありながらある程度は確実な——ひとつの重要なメタ認知的働き、つまり現状に問題なしという事実判断とそのまま継続すべしという指針確認なのである。感情が強く意識されずに、それでいて確実に自己の状況が感情の働きによってモニターされていること（情動的否定知！）、ここに＜冷静な思考＞の内実があるといえる。

さて、本筋に戻って、人物AとBが同じように「この問題Pを考えるうえでこれこれの視点／方法／原理／アイデアが重要だ。なぜならこれこれだからだ」という認識Qに立ち至ったとしよう。二人の認識内容はその言語的な明示的形式でみれば大差はないだろう。しかし、その認識内容と結びついた重要さについての感覚＝感情、つまり情動的判断の点では決定的な違いがあ

るかもしれない。しかもこの違いは言語で明示化、客観化できない。問題 P への答えを追求する思考過程においてそうした視点／方法等々が具体的にどれだけ重視され活用されるのかという思考のアクチュアルな過程や成果の中に間接的、結果的に示されるにすぎないのである。(この点でさらにいえば、情動的な認知作用としての価値判断には、思考行為に直結して認知上の諸契機・諸能力を賦活・動員・集中する能力・機能があるということも見逃せない視点だが、仔細には立ち入れない)。寸言知の場合、すでに触れたように、その明示的内容の自明度や共有度が高いだけに、情動的なメタ判断の個人差は一層広がる。知は大なり小なり普遍妥当的である、またそうあらねばならないという一般の知識論的命題には、知が(一定の認識能力をもつ)どのような認識主体に対しても等しく対称的に妥当するという含意がある。しかし、知の情動的側面を完全に無視できないのだとすれば、知の普遍妥当性命題には少なくとも一定の修正・限定が必要であろう。

そうしてここで改めて思い至りたいのは、この情動的判断の差異が各人の実体験、つまり人生そのものの広がりや深まりの違い、したがって情動記憶の質と量に強く規定されているという事情である。知は人生なり。いずれにせよ、情動的側面の看過ないし軽視が従来の知識論の重大な難点であることを、寸言知の考察は強く示唆しているように思える。

[参考文献]

- ・穴田義彦、1984、「ことわざの社会心理学」『エスプリ』No201。
- ・池田光義、2012、「『否定知』『メタ知』考」(跡見学園女子大学文学部人文学科)『人文学フォーラム』第10号。
- ・加藤尚武、1988、『人間通になるための諺学入門』、PHP 研究所。
- ・金子武雄、1983、『日本の諺(四)』、海燕書房。
- ・瀬戸賢一、1988、『レトリックの知 意味のアルケオロジーを求めて』、新曜社。
———、1995、『メタファー思考 意味と認識のしくみ』、講談社現代新書。
- ・外山滋比古、2007、『諺の論理』、東京書籍。
- ・ダマシオ、A.R.、2012、(田中三彦訳)『生存する脳——心と脳と身体の神秘』、講談社。
- ・村越行雄、2012、「換喩的思考と提喩的思考に基づく行動様式」(跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科)『コミュニケーション文化』第6号。
- ・レイコフ、G. & ジョンソン、M.、1986、(渡部昇一他訳)『レトリックと人生』、大修館書店。
- ・Lenk, H., 1994, “Von Deutungen zu Wertungen. Eine Einführung in aktuelles Philosophieren”, Frankfurt/M.: Suhrkamp.